

米国環境共生都市ポートランドの教育に見る「エシカル」の可能性

葭内 ありさ*

Possibility of 'Ethical' education in U.S. Environmentally Friendly City Portland

Arisa Yoshiuchi

Abstract

Portland City is a town that can be described with ethical keywords such as environmentally conscious, organic, local, urban community, specialty coffee. Ethical consumption considers how our life affect with the environment and human rights. This study reveals how school education is involved in fostering an Ethical Mind that leads to a sustainable life. As a method, surveys through materials such as school books and visits and interviews were used. As a result, it turned out that the Ethical education of human rights represents the characteristics of the American society. Emphasis is placed on the desire for domestic diversity to respond to challenges such as race and poverty in the US, rather than the debate on issues such as assistance for developing countries. Ethical education in Portland can be said to be a way of education for giving possibilities to students, correcting disparities, deepening mutual understanding with different people, coexisting and realizing a sustainable society.

Keywords: Portland, Ethical, High School, Diversity, Consumer education

1 はじめに

米国オレゴン州ポートランド市は1960年代より行政と民間が連携した環境共生を主眼とした都市政策で成功し、注目されている¹。環境配慮、有機栽培、地産地消、都市型交流コミュニティ、スペシャルティコーヒー、といったエシカル消費と関連して語られる街である。Davis&Shobe (2015)によれば、ポートランドの住民は、自らを環境派である、と認識している者が多い。

エシカル消費とは、生産から消費、処分に至る各過程において環境負荷や生産者の人権等に配慮する消費行動である。消費者庁の消費者基本計画では、「地域の活性化や雇用なども含む、人や社会・環境に配慮した消費行動(倫理的消費)」と定義しており、持続可能な社会の実現に必要な概念として、近年日本でも広まりを見せている。具体的なカテゴリー例として、リサイクル・アップサイクル、フェアトレード、

キーワード：ポートランド、エシカル、高校、多様性、消費者教育

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

有機栽培、天然素材、環境負荷の少ない素材、伝統技術の継承、産地支援、社会的弱者支援、動物福祉、などがあげられ、ポートランドでは様々なエシカル消費の事例が見られ²、日本でもポートランドスタイルが現在流行している。

このようにエシカルで環境指向の強いポートランドでは、学校教育は、どのような形で持続可能な生活に繋がるエシカルマインドの醸成に関わっているのだろうか。我々の生活がどのように途上国における生産者の人権や、環境に関わっているのかを生徒に理解させ、ライフスタイルの変革に繋がるような教育が行われているのだろうか。

ポートランドに関する先行研究は、都市開発についてのものが大半であり、教育に関するものはごく限られている。またその多くは高等教育に関するものであり、ポートランド州立大学におけるジェンダー教育の事例分析等がある(渡辺,石河,2016)。初・中等教育については、ポートランド市の教育概況(池田,2005)や、環境教育に関わるものとしては、日本の中学校にあたるミドル・スクールの報告の中で一部触れられているもの(岡村,2005)、ポートランド市近郊の学区の高校における米国地理教育のESDの取り組み(田部,永田,2010)の研究報告があるが、ポートランド市の高校に関わる研究や、エシカル教育の観点に関するものはない。本研究では、高校におけるポートランドの教育に生徒のエシカル消費行動につながるエシカルマインドを育む内容がどのように扱われているのかを検証することで、エシカル教育の意義に迫りたい。

2 対象と方法

本研究では、ポートランドの高校におけるエシカル教育のあり方を明らかにするために、対象をポートランド市の公立学校8校と、私立学校1校とした³。調査資料としては、全校のコースガイドとHP等を用い、公立高校2校と私立学校1校に関しては現地訪問調査を行った。訪問調査は、2016年10月10～12日に行い、授業や施設の視察と、インタビューを行った。インタビューは、A校は校長とスクールキャリアカウンセラー、B校は校長、C校は小学校長兼副学長に行った。また、訪問調査の際は、公立高校はポートランド教育委員会のシニアディレクター、私立校はカウンセラー兼ディレクターが同行した⁴。

3 ポートランドの公立校教育システム

3.1 学制、単位、コース

ポートランド市の初等・中等教育は、幼稚園(Kindergarten)から高校まで表1のような学制をとっている⁵。ポートランド市教育委員会が生徒約49,000人、78の学校を統括しており、このうち、高校は9つある。高校進学には、基本的には居住の学区によって決められ、選別試験はない。希望者は他の学区の高校へ越境入学することができ、この制度は「スクール・チョイス」と呼ばれている。ポートランドでは2015年度は22%の生徒が越境入学をしている⁶。

調査対象校のコースガイド⁷やインタビューからポートランドの高校のカリキュラムをまとめると概要は以下の通りである。

高校の必要単位は表2の通りであり、必修科目18単位と選択科目6単位、の計24単位の他に、基礎技能基準やキャリア教育が設定されている⁸。オレゴン州のカリキュラムを基本としながら、ポートランド市のカリキュラムで運営されており、オレゴン州全体との主な違いは外国語の履修が必修2単位の点である。特徴として、教科の科目以外に、オレゴン州基準の読み、書き、数学の基礎技能を満たすことが求められること、さらに、生徒の将来を見据えたキャリアパス育成の教育課程となっていることが挙げられる。

表1 ポートランド市の学制

	年齢	学年	学校種
中等教育	17	12	High School
	16	11	
	15	10	
	14	9	Junior High School Middle School
	13	8	
	12	7	
初等教育	11	6	Elementary School
	10	5	
	9	4	
	8	3	
	7	2	
	6	1	
	5	K	Kindergarten

(押尾, 2006 を参照に筆者作成)

表2 ポートランド公立高校の卒業要件

必修科目 18 単位 英語 (4 単位) 数学 (3 単位) 理科 (3 単位) 社会 (3 単位) (グローバルスタディ、米国史、政治経済) 体育 (1 単位) 保健 (1 単位) 外国語 (2 単位) 以下から選択必修 (1 単位) (美術のみ設置の高校もあり) ・美術 ・キャリア技術教育 ・履修済の外国語の 3 単位目	教科外 基礎技能 読み・書き・数学に関してオレゴン州の必要な能力基準を満たすこと。 以下の習得を目指す ・クリティカルに読むこと、書くこと、話すこと、聴くこと ・市民性 ・グローバルリテラシー ・自律 ・コミュニケーション力 Personalized Learning Diploma Requirements (PLRs) 個人的な学習ディプロマ要件 ・個人学習計画とプロフィール ・キャリアに関する学外学習と報告書 ・履歴書を完成させる ・高校卒業後の自分の進路と職業に関するの学術的・専門知識に関する論文
選択科目 6 単位	
総単位 24 単位	

(A 校、B 校スクールブック、ポートランド教育委員会 HP を参照に筆者作成)

キャリア形成に関わる教育内容として、キャリア計画書やレポート、さらにインターンシップやボランティア等の学外活動が課されている。ポートランド教育委員会によれば、近年キャリア教育を2倍以上に増やしており、そのことが高校卒業率を上昇させているという。また、高校は大学やコミュニティ・カレッジと連携しており、単位を取得することができる。例えば、訪問した A 高校は、隣接した敷地のコミュニティ・カレッジとの高大連携を行っており、高校生は 10 年生から各自選択したコミュニティ・カレッジの単位を取得でき、ポートランド市の 24 単位の他に 12 単位を取得することになっている。

水準の高い教育が求められる国際バカロレア (IB) コースを設置している公立高校は 9 校中 2 校、発展学習科目 (アドバンスドプレースメント、AP 科目) を設置している高校は 5 校である。また、特別に高い能力を持った生徒は、申請で認められると別途 Gifted and Talented として英才教育を受けることが出来、意欲や能力の高い生徒への方策がなされている。

3.2 学区とダイバーシティ

図 1 は、ポートランドの公立高校の学区である。ポートランドは、市中央に南北にウィラメット川が流れ、その西側と東側で比較すると、東側、さらに北側や中央から離れるほど歴史的には比較的所得者の居住エリアが多い。貧困家庭の為の学校における朝食・昼食費無料または減額のプログラム CEP

(Community Eligibility Provision) は、米国の国家プロジェクトである。このプロジェクトは 2010 年から 3 年間限られた州でのパイロット校での実施がなされ、2014 年 7 月からは全米で行われている。これにより、相対的 130% 貧困ラインを超える家庭の生徒は、通常、申請により学校での朝食・昼食が無償となる。(米国農務省 CEP プログラム HP)。

ポートランドの 9 つの公立高校のうち、相対的貧困率の家庭の割合が高い地区の 3 つの高校、A 校、B

高校、C高校はCEP指定校として、自動的に全生徒が食費無償の対象となっている。いずれも東側に位置する高校である（ポートランド教育委員会 HP）。

A校はアフリカ系が多く、C高校はスペイン語で学べるコースを設けていることもあり、ヒスパニック系が4割を占める。B高校は白人比率が多いがヒスパニック系も他校と比較するとやや多い。一方、西側や南側の高校は白人比率が高い。このように現在東岸は再開発で地価も高騰し人気のエリアも多いながら、高校の生徒比率ではマイノリティが多く低所得家庭の多い地区、西側は白人比率の高い高校地区となっている。2015年度は、東側のCEP指定校では食費免除の対象となる所得水準の家庭は生徒の43-46%であるのに対し、西側の2校はそれぞれ7%、13%と、大きな差がある（ポートランド教育委員会 HP）。

ダイバーシティに関して、ポートランド市教育委員会は、人種的に平等な教育方針や、人種や性的志向、

ジェンダー、妊娠や結婚、障がいの有無、経済状況等による差別を禁止する方針を宣言している⁹。東側の高校では、D高校は、高校のHPにポートランド教育委員会のこの人種平等ポリシーを掲載しているのみならず、人種に関する動画を掲載し、強く人種平等を打ち出している（Grant High School HP）。また、C高校も「本校は、オレゴン州で最もダイバーシティを実現している学校である」と学校紹介のトップに記載している

（Roosevelt High School HP）。訪問調査時では、B高校では、食堂に生徒の様々な色の手形からなる「ダイバーシティウォール」を掲示し、ダイバーシティがキーワードとなっていた。また、B高校の2017年の黒人の歴史の記念月集会を開催した際の動画はポートランド教育委員会のHPトップに掲載された。このように、東側の高校、特に北側のC校、A校、D校、B校ではダイバーシティを特に強く意識していることがわかる。

一方、東側の高校でも、南側では白人比率が西側の高校同様に高く、アフリカ系やヒスパニック系の生徒の比率が低いH校では、人種構成についてのHPへの記載はみられず、ダイバーシティについても特に触れていない（Cleveland High School HP）。

白人比率の高い西側の2校では、最も進学校とされるE高校のHPの学校方針では、リーダーとしての資質

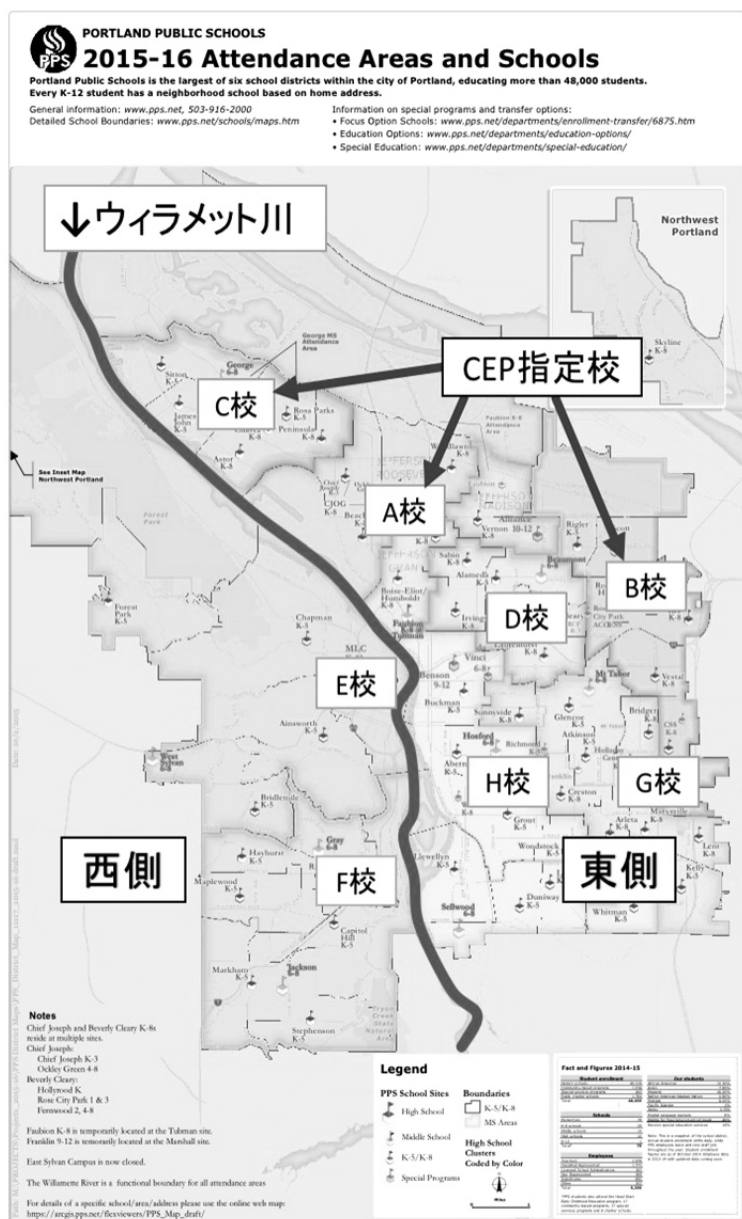


図1 ポートランド公立高校の学区
(出典：ポートランド教育委員会の学区図（2015-2016）を元に筆者作成)

を育てる旨等が強調されており、方針にダイバーシティという言葉自体は入ってはいるものの、特に説明が加えられてはならず、全体としてダイバーシティが東側の高校程強調されている訳ではない（Lincoln High School HP）。西側F高校のHPでは、学校紹介に人種構成やダイバーシティについての記載はなく、学習のことのみに記載されている（Wilson High School HP）。

このように、ポートランド市の方針はいずれの学校にも共通してはいるものの、よりマイノリティや貧困、ジェンダーの課題を抱える地域の高校の方が、より強くダイバーシティを意識し強調していることが窺われる。

4 エシカルな教育事例

以下では、インタビュー調査や学校の科目履修案内から、エシカルに関する教育事例について、必修・選択科目と、教科外学習別に見ていく。

4.1 必修・選択科目の授業におけるエシカル教育

4.1.1 必修・選択科目としての理科における環境教育

エシカル教育に最も関連するもの一つに環境がある。環境に関わる科目は、必修または選択の理科の科目として、「環境科学」がいずれの高校でも設置されており、水、空気、エネルギー、環境負荷、といった一般的な環境学習が行われている。発展科目である理科 AP 科目として設置している高校もある（各校コースガイドより）。

4.1.2 必修選択科目としての社会や英語の人権教育

また、社会や英語の選択科目に、エシカル教育である人権を扱っている科目がD校、E校、G校、F校A校で見られた。ここでの人権、とは、途上国生産者の人権ではなく、人種、ジェンダー、民族、宗教、性的指向、障がいの有無、といったダイバーシティに関わる人権である。D高校では、英語の選択科目「フェミニズムとジェンダー学」が大学と連携した授業として設置され、E高校とG高校では社会の選択の授業で人種について学び、F高校では「社会正義」の授業が設置されている¹⁰。

訪問したA高校では、コミュニティ・カレッジと連携した社会の授業で、大学の教員と高校の教員の3名で、ダイバーシティを扱う風景が見られた。授見学時には、生徒は各自が自由な形で用意した、諸問題を表す絵や漫画、ポエムなどを壁に貼って発表し、互いに見合い、アクティブ・ラーニング形式で授業が進んでいた。生徒が取り上げているテーマは、人種、ジェンダー、LGBT、等ダイバーシティに関わるものである。例えば、アフリカ系の女生徒は、美しいアフリカ系の女性の絵を描いた。絵の女性の目からは涙が流れ、口には深紅のバラの花が差し込まれており、その絵には、女性は口を開かずにとだ美しければよい、という趣旨の文が添えてあった。また、別の生徒の漫画では、細い体つきの男の子が、「僕はゲイなんだ」と友人に言うと、「え？ゲイってもっとマッチョに決まっている。君はゲイなんかじゃないね！」と言われて傷つき、ステレオタイプのゲイのイメージに、自分はゲイといえないのか・・・と悩む。しかし最後には、「誰が何といおうと、自分はゲイだ！」と強く宣言する、というものである。ゲイであるかどうか、という論点ではなく、そのイメージについてまで発展したテーマが取り上げられている。授業ではこのような各種の発表の後、ディスカッションを行っていた。また、A校では、学校事務所にも人種平等のポスターが貼られており廊下にも人種平等に関わるメッセージが記されていた。A校では、ソーシャルジャスティス、社会正義としてダイバーシティの重要性が教育されている（2016年10月10日訪問調査）。

A校の学区の地区は、歴史的にアフリカ系が多く住んできたエリアである。かつての人種的居住赤線地区の一つでもあり、2000年代初頭まで住民のほとんどがアフリカ系であった。近年の再開発で地価が劇的

に上昇しジェントリフィケーションが起こり、アフリカ系住民は追い出されつつあるが、黒人教会などがあり、白人が多いポートランドでは少数派のアフリカ系¹¹コミュニティが存在する学区である

(Banis&Shobe,2015)。A校の歴代の校長もごく初期は白人であるが、古くからアフリカ系の校長が非常に多い(2016年10月10日訪問調査)。なお2016年現在のA校の校長は白人女性である。9つの全公立高校のうち、現在女性校長は6校である。B校校長とポートランド教育委員会シニアディレクターへのインタビュー(2016年10月10日)によると、通常は男性が高校の校長になる事が多く、女性が多い現況は、リベラルなポートランドの傾向を反映した、政策的なものという。A校は130%相対的貧困ラインを超える家庭が半数近くあり、学校全体に朝食・昼食費無料のプログラム(CEP)が導入されている。さらに、9つの高校のうち、A校は唯一女学生比率が高いことが際立っており、59%が女子学生である。他の高校では、6校は男女の比率がほぼ同じで、2校は男子生徒が女子生徒よりも1割以上多い(ポートランド教育委員会HP)。A校は、人種とジェンダー、貧困の課題を内包し、ダイバーシティ教育に積極的に取り組んでいることわかる。

4.1.3 選択科目としての農業に関する科目

ポートランドのキーワードの1つに、「ローカル」があり、生産者の顔が見える消費が行われている。エシカル教育を考える上で、ローカルという視点は重要なポイントになる。「ローカル」であることは、地産地消、それに伴う産地支援、輸送時の省エネルギー、といったことにもつながり、誰がどのように何処で生産したか、という消費の背景を考えるエシカル消費のスタイルといえる。毎日市内のどこかで開かれているファーマーズマーケットでは、近郊の農家から有機栽培を中心とした新鮮な農作物や加工品を手に入れることができる。地元の物ばかりを扱うオーガニックのスーパーマーケットも大変人気である。レストランでは、農家から直接仕入れた新鮮な野菜を用いた安価で美味しい食事が楽しめることは、ポートランドの人気の大きな理由の1つとなっている。そのような中、ローカル、有機栽培、持続可能、といったエシカルと言える授業として、農業に関する科目が設置されているのがB校である(2016年10月10日訪問調査)。

B校では、10~12年生対象の選択科目に、「持続可能な農業(Sustainable Agriculture)」を設置している。基礎科目の「持続可能な農業入門」1単位と、「都市農業」1単位からなる。この科目は、コミュニティ・カレッジと連携しており、基礎科目はカレッジの6単位、都市農業は4単位を得ることができ、生物学とAP環境科学を加えて全て履修すると、卒業時に持続可能な農業認定書が授与される。生徒は、都市型農業手法を学ぶ。内容は、実践的な学習やガーデニング、料理、ビジネススキル、であり、数世代にわたり環境に悪影響を与えずに食物や繊維を育てる持続可能な農業を学ぶ。

授業では、高校にある畑や温室での実習のみならず、地元の農家も訪問する。農家では、有償または無償のインターンシップも行い、ネットワークを広げ、ビジネススキルを学ぶ。高校で行われるファーマーズマーケットでは、生徒自作の農産加工物が販売され、生きたビジネスを学ぶことができ、職業につながる実践的な内容と言える¹²。なお、高校の畑は車椅子でも作業できるような高さのものもあり、ここでもダイバーシティに配慮がある(訪問調査、Madison High School コースガイドより)。

以上のように、必修・選択科目としてのエシカルな授業は、理科において環境教育が広く行われている。人権に関しては、むしろ、マイノリティや貧困、格差という課題を解消する方策として、ダイバーシティ教育としての題材として扱われている。また、職業訓練とも言えるエシカルな農業の授業が、相対的貧困率の高い地区のB高校で行われている。

いずれの高校でも、エシカル消費の人権に関する面を教えるようなことが伺える、国際協力、サステイナブル、途上国支援、エシカル、といった言葉を冠した科目名の授業は設置されていない。しかしながら、そのような人権的な教育は各教員が意識を持ち教えており、その強弱は教員による、との回答が、訪問したA校B校C校の校長インタビュー¹³で共通して得られた。また、エシカル、という言葉は直接用いては

いないものの、「Social Justice」、社会正義、の範疇として日本のエシカル消費における人権的な側面を扱っている。

4.2 教科外学習として履修するエシカル教育

次に、教科外の個人的な学習ディプロマ（Personalized Learning Diploma Requirements、以下 PLRs）、に位置付けられるエシカル教育についてみていくこととする。PLRs では、進学や将来の職業につながるようなインターンシップやボランティア活動などの課外活動が推奨されている。生徒は個人的に学校が連携する団体や会社で課外活動をすることもあれば、学内でプロジェクトベースの活動を行うこともある¹⁴。

PLRs では、スクールキャリアカウンセラーが活動をサポートし、活動のコーディネートや、評価、大学進学のための評価を行う。以下は特に A 高訪問調査による PLRs の事例である。A 高校のキャリアカウンセラーへのインタビュー調査では、外部連携も行いながらのエシカルなプロジェクトベースの活動が行われていることがわかった（2016年10月10日 Jefferson 高校訪問調査）。

4.2.1 高校の雨水利用のプロジェクト

A 校では学校の雨水の有効活用を目指し、生徒と学校の雨水排泄改善のプロジェクトが行われていた。目的は、生徒の環境への意識向上である。このプロジェクトが行われた背景には、雨の多いポートランドでは、雨水利用はよく行われていることがあるとのことであった。

4.2.2 近隣の資材リサイクルセンターと連携したプロジェクト

また、A 校で行われたプロジェクトとして注目されるものに、2010年に75名の生徒がメンバーとなり、4月22日のアースデイには二酸化炭素排出に関わる環境配慮のイベントである、「カーボン・フットプリントフェア」がある。これは、一般に高校が開放されて行われたもので、高校の太陽パネルプロジェクトの紹介や、どのように環境に配慮するかが提案された。プロジェクトで連携した近隣の大型の資材リサイクルセンターの「リビルディングセンター」は、1998年に設立されたNPO組織である。住宅を解体する際に排出される建材や、照明、バスタブ、タイルといった建築に関わるあらゆる物品をリサイクルする業務で資材を大切に用いリサイクルする環境配慮の活動を行っている。センターは、市街地にあり、一般市民もリサイクル素材を買いに訪れる。また、大人向けの職業訓練やワークショップなどの教育も行っており、多くの幅広い人種、年齢層、移民、のスタッフがボランティアとして働いており、その中には高校生も参加している¹⁵。

4.2.3 ポートランド公園組織と連携した10代向け環境教育「GRUNTプログラム」への参加

次に、高校とポートランド公立公園が連携している、職業訓練的な環境教育である、グラントプログラムを見ていく。A 高はこのプログラムと連携し、生徒の参加を推奨している。グラント: Grunt とは、Green spaces Restoration & Urban Naturalist Team の略である。その目的は、都会の高校生に自然に触れる機会と職業訓練の機会を与える事、アウトドアを楽しむ事で心身の健康を増強する事、社会性を身につける事、都会の10代が自然に関心を持ち、環境分野の仕事に若者が就く多様性を育てる事、である。グラントプログラムの報告書によれば、オレゴン州の25%の10代は太り過ぎか肥満で、35.4%は職がなく、35.3%の高校生は就業年数で高校を卒業できない。グラントプログラムは、そのような現状への方策である。プログラムでは、高校10年生が毎週土曜日、3か月65時間の公園での環境科学の学習とボランティアの職業訓練を受けることで、夏に公園やキャンプでのスタッフとして有償の職を得ることができる。さらに、卒業生は25歳まで有償の職を得ることができ、カレッジの奨学金を得る場合もある。高校8年生、9年生にはグラントジュニアプログラムが設置されている。参加する高校生は7割近くが有色人種で、半数以上が英

語が第2言語であり、8割以上が高校で食費免除の対象となっている生徒である。10代の失業率が高いポートランドで、グラントプログラムは若者を自然に親しませ、やる気を引き出すだけではなく、環境分野の人材に若者を流入させてダイバーシティをもたらし、若年層の雇用対策の意味を持っている（Portland Parks. org, 2013）。

プログラムに連携する¹⁶ポートランドの高校は、A高校のみならず、B高校、C高校の3校である。いずれも前述の、公立高校9校のうち3校ある貧困家庭のためのCEP全額食費免除指定校であることがわかる。

A高校のスクールカウンセラーはインタビューにおいて、このプログラムをきっかけに、生徒に環境に興味を持たせ、職を得させることができる、ということ強調していた。また、前述のグラントプログラムの報告書には、B高校の理科教諭から以下のようなメッセージが掲載されている。

私は、これらのプログラムは生徒達にとって人生を変えるものだと信じています。プログラムで用いられているメンター制度や、職業や生涯で使える技能は、生徒が「経済的に」中流に入ることを可能にします。これは私が知っているこの種の唯一のプログラムです。

—ジル・セミリック、B高校理科教諭—

このメッセージからは、このプログラムの対象と想定している生徒達は、経済的に困難であり、経済的以外の面でも中級ではない、つまり下級階層とされる家庭の生徒であることがわかる。また、このプログラムによって実現されるとしているのは、「経済的に」中流になることであり、ここで唯一効果を出しているプログラム、と述べられていることは注目されよう。このことを裏付けるかのように、市の環境教育予算の43%となる23万1925ドルがこのプログラムに割かれている（Portland Parks. org, 2013）。

以上のことを考えても、グラントプログラムは格差社会是正に大きな意味を持つと考えられていると言える。だからこそ、そのプログラムに参加している高校は、ポートランドで最もマイノリティや貧困の課題を抱え、生徒によりよい道筋を模索することが必須の高校群であるといえよう。生徒達は、職業に直結するプログラムに参加することで、将来への希望を見出すことが出来るのである。

このように、公立高校において、教科内外におけるエシカル教育のあり方は、環境共生都市ポートランドにふさわしく環境教育が広く行われている一方で、人権面では米国社会の抱える人種問題、経済的格差是正といったダイバーシティ教育がエシカル教育として希求され、地域の抱える問題を解決することを目指している。

4.3 学校全体として取り組むエシカル教育

私立E校ではサスティナブルを学校の方針として打ち出している（2016年10月12日小学校長兼副学長Ms. Vicki Roscoe氏インタビューより）。方針として、持続可能な社会を作るのに必要な知恵や視点、周囲を巻き込む力を、挑戦的で民主的な学校教育を通じて育み、高校卒業後、知的で、社会性を持ち、『エシカルに』社会を変えて行く力をもつ卒業生を送り出す、としている。E校は、ポートランド市で1、2を争う人気で高水準の教育を提供する私立校であり¹⁷、全員が4年生大学に進学する。奨学金制度や家庭の収入により学費減免制度はあるものの、免除がなければ学費以外の寄付や諸経費等で年間500万円程度必要なこともあるという。その施設や教員の質は充実しており、校内の建物は木製を基調としたロッカーや、創立当時のレンガ造の校舎に合わせた暖かみのある校舎デザインなど、伝統的なものを大切に扱い天然素材を用いた、エシカルといえる要素¹⁸が見られる。自由な気風に溢れるE校では、「経験を中心とした教育」を大切にしており、自然と親しむ学外のフィールドワークも多く取り入れ、自律した人間性、リーダーシップと市民性を育てている¹⁹。E校では、10年前から、小学校で1年生から、自然や食べ物などを題

材に、総合的に発達段階に合わせて繰り返しサステナブルを学ぶ、スパイラルな学習を行っている。生徒による自発的な活動も推奨しており、2016年秋からは、高校の環境活動チームの生徒の発案と署名運動により、校内ではすべてのペットボトル飲料が売られなくなった。

また、女性によって創立されたE校では、歴史的にユダヤ系白人の生徒が多かったが、現在はダイバーシティを唱っており、移民1代目か2代目の家庭を含む有色人種の家庭が40%で、34の言語が家庭で用いられている。校内には、「クリティカルシンキング」「インクルージョン」等の標語と共に、「ダイバーシティ」が掲げられており、公立高校同様、ダイバーシティがキーワードであることが強調されている²⁰。

以下はE校の学校長のブログに書かれていた、ダイバーシティについての言である。

ダイバーシティとは、社会において見られる、階級、人種、民族、性的指向、ジェンダー、障がいの有無、宗教その他の違いの幅のことです。

私は、すべての子供が安心して、誰なのか知られていて、自分に価値があると感じる多様性に満ちたコミュニティを創造することが効果的な学習の前提条件であると信じています。多様でインクルーシブな学校で、生徒達は相互に関連したグローバルなコミュニティで生きるために必要なスキルを学びます。将来の成功は、あらゆる種類の人々と協力して、その交流に好奇心、敬意、謙虚さを持つ能力に左右されるのです²¹。

このようにE校では、エシカル教育として、環境面ではサステナブルを唱った環境教育の学校全体での取り組みが見られ、人権面ではダイバーシティが重要とされ推進されており、E校の生徒自体も、以前の白人を主体とした構成ではなく、多様な人種・民族から構成されている。E校に於いても、公立校同様、持続可能な環境科学が高校で科目として置かれている一方、途上国支援といったエシカルの人権面を学ぶような具体的な科目名は見られないが、公立高校との違いは、よりグローバルリーダーシップ、世界市民に必要なものとしてダイバーシティを捉えていることである。学校長ブログでは、さらに、人種や経済状況など、自分がどのような点で有利であったり、有利ではなかったりするかを理解し、その有利な点を生かしてどのように社会が良くなる様に役立つかを考えることの重要性も説かれており、持続可能な社会を目指すエシカル消費の考え方と共通する思想がE校の教育にあることがわかる。貧困地区を中心とした公立高校でのエシカル教育が職業訓練的な要素を持つことでダイバーシティの実現や格差是正へ向かうのに対し、E校ではダイバーシティ理解を携え社会を変革するリーダーやチェンジメーカーとしての生徒を育むことで格差是正へと向かっていると言える。

5 おわりに—エシカル教育が実現するダイバーシティ

以上のように、ポートランドの高校に於ける、エシカル消費の視点を育む教育の在り方や意義を見てきた。ポートランドの高校では、大きく分けて、エシカル消費を環境面から考えるための教育と人権面から考えた教育がなされていることが明らかになった。まず、エシカル消費の環境面に関しては、どの高校でも一定の水準の教育行われていることがわかった。ポートランドは歴史的に林業で収入を得、豊かな自然に恵まれていることが礎となり、建築業、不動産業等の民間企業と連携した長年の環境共生のスタイルを持っている。さらに、廃材の活用、環境に配慮して整備された交通機関などのインフラ、地元の農家と連携した新鮮な食材による食生活を享受できるような街の環境自体が教育的であり、ポートランド市民の高い環境配慮への意識を形作ってきたという特徴が、このような教育水準にも相互に結びついているといえよう。

一方、人権面のエシカル教育については、米国の特徴を表している。日本やイギリスでエシカル消費と

して中心的に取り上げる事柄は、消費の背景に存在する搾取構造の問題、途上国の生産者の人権を守ることや、被災地支援などである。一方ポートランドにおいては、エシカルは、人種政策や、税金を投入しての路上生活者への支援²²といった事柄に通じるものである。

高校教育においては、人種的にマイノリティが多く経済的にも貧困率の高い家庭の多い学区では、より実質的な職業へつながるダイバーシティ実現の方策として、サステナビリティに関するエシカルな教育が行われている。一方、私立E校のような、経済的に恵まれている学校においては、職業訓練的な意味合いは薄れ、グローバルなより広義のサステナビリティの実現、というエシカルな教育が行われている。ポートランド市は教育においてダイバーシティを唱え、方策を多く行っているが、高校が標語としてダイバーシティを掲げ、教育委員会が人種構成や収入について詳細に報告していることから、真のダイバーシティに向けた途上であると伺える。

このように、ダイバーシティ、という言葉に集約される論点がポートランドの人権面での「エシカル教育」の中心であり、国外へ目を向けた途上国支援、といった論点よりも、米国の抱える人種や貧困といった課題に対応する、国内のダイバーシティへの希求により重きが置かれ、格差社会是正のために有益なものとしてエシカル教育が行われているのである。

ここに、エシカル教育の可能性が見えてくる。エシカル消費は、貧困や環境などグローバルな課題を解決し、持続可能な社会の実現に必要な不可欠なものでありながら、従来時に単に経済的に余裕がある層の志向と誤解されることがあるが、そうではないことをポートランドの事例は示している。ポートランドのエシカル教育は、持てざるものに可能性を与え、格差を是正し、異なる他者との相互理解を深め共生し、持続可能な社会を実現していくための教育のあり方といえる。

反ダイバーシティ、反サステナビリティとも言えるトランプ政権が誕生した現在、むしろより一層ダイバーシティ、ひいてはエシカル教育の重要性は増すとと言える。ポートランドでは、環境教育に特化したミドル・スクール等もある。そのような学校の教育状況も含めて、エシカル教育が実現するものを見ていくことを今後の検討課題としたい。

注

¹ 全米の住みたい都市人気ランキングで上位に挙げられ、カルフォルニアの地価高騰の影響や、ゴールド・ラッシュ宛らの「ポートランドドリーム」を夢見て人が流入して人口が増加しており、2016年度の人口は約63万人である（米国内閣調査）。

² 例えば、新しいホテルのトレンドとして世界中から注目し模倣されているポートランドのエースホテルは、廃材を利用したアップサイクルの建築や、地元の商材を用いた内装や備品、滞在者のコミュニケーション促進（吹田,2010）などの点が、エシカルといえる。

³ 私立学校E校は、プレスクール、幼稚園と、小学校から中学校、高校までの12年間の教育を行う学校である。なお、公立校全9校の内、1校は専門教育に特化した職業高校のため、ここでは残りの8校の学校教育を特に対象とした。

⁴ A校校長 Ms.Calvert Margaret 氏、B校校長 Ms.Callin Petra 氏、E校学校長兼副学長 Ms.Vicki Roscoe 氏(オレゴン州の最優秀教員に選ばれている)、にインタビューを行った。訪問調査の際は、公立高校はポートランド教育委員会のシニアディレクターMr.Oscar Moreno Glison 氏、私立校はカウンセラー兼ディレクターMs.Blythe Butler 氏が同行した。

⁵ 米国では州又は学区により、初等・中等教育制度は多様であるが、期間は共通して12年間であり、高校は9～12年生の4年間である（押尾,2006）。1～12年生は義務教育で無償である。ただし特別活動等については別途費用が必要となる(Madison 高校コースガイド)。米国の教育行政は、州及び学区が中心的役割を担っている。地方教育委員会の役割は、教育課程の策定、教員の任用など公立学校の設置・維持・管理等にあたる（押尾,2006）。

⁶ ポートランド教育委員会 HP, <http://www.pps.net> (2017,2,28 最終閲覧)。

⁷ Cleveland High School Course guide 2016, Franklin High School Course guide 2016, Grant High School Course guide,

Jefferson High School Course Guide ,2016, Lincoln High School Course guide, 2016, Madison High School Course Guide, 2016, Roosevelt High School Course guide, 2016, Wilson High School Course guide, 2016。

⁸ 高校により、キャリア教育も1~2単位としている。

⁹ トランプ政権誕生により、連邦政府はトランスジェンダーの生徒への保護を削減の方針を取る、としたことについて、ポートランド市教育委員会は連邦政府の方針に関わらず、従来の性的志向による差別を禁止する方針やガイドラインの変更や縮小はしない、と宣言している(ポートランド教育委員会 HP)。

¹⁰ Grant High School、Lincoln High School、Wilson High School、Franklin High School コースガイドより。

¹¹ ポートランド市の2015年度のアフリカ系アメリカ人の比率は6.3%、白人比率は76.1%(米国国政調査)であり、公立高校の2015年度のアフリカ系生徒は10%、白人比率は55.9%と、アフリカ系は少数派であるが、A校は生徒の46%がアフリカ系米国人、他は混血である(ポートランド教育委員会 HP)。

¹² また、Madison 高校ガーデンコーディネーターボランティアによれば、ポートランドの中でも相対的貧困率の高い地区であるB校の生徒は、新鮮な素材が安価に手に入る生鮮食品店が近くになく、新鮮な素材を用いた食事よりも、むしろファーストフードチェーンで食事をする事が多く、そのような生徒に、自分で育てた野菜を用いて栄養のある食事をする事に馴染ませることも、この授業の意図するところであるという(Oregon Live, 2014年4月9日記事 http://www.oregonlive.com/portland/index.ssf/2014/04/urban_farming_at_ne_portlands.html, 2017,5,5 最終閲覧より)。

¹³ 10月10日 Ms. Calvert Margaret 氏、Ms. Calin Petra 氏、10月12日 Ms. Vicki Roscoe 氏。

¹⁴ 同注7。

¹⁵ 2016年10月10日訪問調査より。

¹⁶ 2008年から2013年のプログラム卒業者は158名である。2013年度時点でのプログラムパートナーは42で、ナイキやオレゴン地域基金など4つのスポンサーの他、地域の商業や諸組織のパートナーと、12校の学校が連携している(Portland Parks. org, 2013)。

¹⁷ E校は、公的補助金を受けず、寄付と学費のみで運営されるインディペンデントスクールである。E校は、プレスクール、キンダーガーデン、1-5学年のロウワースクール、6-8学年のミドル・スクール、9-12学年のアップパースクールからなり、男女比は1:1である。2016年度の学費は、プレスクールで年間22,080ドル、高校は29,640ドルである(Catlin Gable スクールブック)。

¹⁸ オレゴン州から始まり全米に広がった環境建築基準の認証等は受けておらず、特別に環境に配慮した校舎ではない(Catlin Gable カウンセラー兼ディレクターMs.Blythe Butler 氏インタビューより)。

¹⁹ モンテッソーリ教育を取り入れ、教科書は中学までは用いられず、カリキュラムは独自のものである。高校では1クラス平均15名で、話し合いなどを中心とした授業が行われている。教員は小学校から高校まで教科による縦割りであり、月に一度ミーティングが行われ、一貫性を持つ教育が行われている(Catlin Gable 小学校長兼副学長 Ms.Vicki Roscoe 氏インタビューより)。

²⁰ 訪問調査,Catlin Gable スクールブック, Catlin Gable, 2016, より。

²¹ Tim's blog, <http://www.catlin.edu/page.cfm?p=696> (2017年3月31日最終閲覧)。

²² ポートランドでは、人口流入に伴い、路上生活者が多く見られる。マルトノマ郡とポートランドの住宅局による2013年1月23日の統計では、2869名の路上生活者が数えられている(Banis&Shobe, 2015)。

参考文献

アメリカ合衆国勢調査局 HP <http://www.census.gov> (2016,11,3 最終閲覧)。

米国農務省 Food and Nutrition Service School Meals CEP HP ,

<https://www.fns.usda.gov/school-meals/community-eligibility-provision> (2017,5,5 最終閲覧)。

Benson Polytechnic High School HP, <http://www.pps.net/benson> (2017,2,18 最終閲覧)。

Catlin Gable HP, <http://www.catlin.edu> (2017,3,27 最終閲覧)。

-
- Catlin Gabel, 2016a, School Book, Portland, OR.
- Catlin Gable, 2016b, The Caller the magazine for alumni, parents ,and friends of Catlin Gable School Spring 2016, Portland, OR.
- Cleveland High School, HP, <http://www.pps.net/site/default.aspx?DomainID=109> (2017,2,28 最終閲覧).
- Cleveland High School Course guide,2016. Davis Banis, Hunter Shobe, 2015, 'PORTLANDNESS A CULTURAL ATLAS' ,Seattle, WA, Sasquatch Books.
- Franklin High School HP, <http://www.pps.net/Domain/116> (2017,2,18 最終閲覧).
- Franklin High School Course guide,2016. Grant High School HP, <http://www.pps.net/site/default.aspx?DomainID=119>(2017,2,28 最終閲覧).
- Grant High School Course guide,2016.
- 池田満 ,2006,「ポートランド市の教育概要」,『海外の教育』,268号,pp.17-19.
- 消費者庁,2016,消費者庁基本計画.
- Jefferson High School HP, <http://www.pps.net/Domain/128> (2017,2,18 最終閲覧).
- Jefferson High School Course guide, 2016.
- Jefferson High School,2nd Annual JHS Carbon Footprint Fair, 2014.
- Lincoln High School HP, <http://www.pps.net/Domain/136> (2017,2,28 最終閲覧).
- Lincoln High School Course guide, 2016.
- Madison High School HP, <http://www.pps.net/Domain/138> (2017,2,18 最終閲覧).
- Madison High School Course guide, 2016.
- NAIS : National Association of Independent school HP,
<http://www.nais.org/About/Pages/About-NAIS.aspx?src=utility>(2016,11,13 最終閲覧).
- 押尾宏,2006,「アメリカ合衆国の教育事情」,『海外の教育』,268号,pp.2-6.
- 岡村知恵子,2005,「米国ミドル・レベル教育に関する一考察—オレゴン州ポートランド市の事例に焦点をあてて—」,
『関西教育学会紀要』,29,pp.106-110.
- Portland Parks. Organization, 2013,'Teen Environmental Education fiscal Year 2012-2013 Report', Portland OR.
- ポートランド教育委員会 HP, <http://www.pps.net> (2017,2,28 最終閲覧).
- Roosevelt High School HP, <http://www.pps.net/Domain/149> (2017,2,18 最終閲覧).
- Roosevelt High School, Course guide, 2016.
- 吹田良平,2010,『グリーンネイバーフッド』,織研新聞社.
- 田部俊充,永田成文,2010,「米国地理教育におけるESDの現在—北米環境学会報告およびポートランドでの取り組み」,
『地理』,55-9,pp.104-110.
- 渡辺 かよ子. 石河 敦子,2016,「大学におけるジェンダー教育の可能性拡張に向けて : ポートランド州立大学の学内機
関の事例から」,『愛知淑徳大学論集. 文学部・文学研究科篇』,41,pp.117-133.
- Wilson High School HP, <http://www.pps.net/Domain/162> (2017,2,18 最終閲覧).
- Wilson High School, Course guide, 2016.
- 山崎満広,2016,『ポートランド—世界で一番住みたい街を作る』,学芸出版社.

付記

研究は科学研究費奨励研究 2016 年（葎内）KAKENNo.16H00147 の助成を得て行ったものである。

謝辞

本論文を作成するにあたり、調査にご協力いただきましたポートランド教育委員会、各校の皆様にご心より御礼申し上げます。